「“あの頃”の歌謡タンゴ」復刻に取組んで

～ステレオ録音黎明期のレコーディング～

高橋 廸良

はじめに

タンゴ専門家はもとより、タンゴファンが求めて止まなかった旧 LP 盤が「オルケスタ· フォンテ：幻の歌謡タンゴ（Vol.1、Vol.2）」として CD 化され、5 月 24 日に発売された。

なぜこの復刻盤が「幻の歌謡タンゴ」と命名されたのかというと、この LP を日本コロムビアの制作ディレクターとして制作担当した筆者が、タンゴ評論家の西村秀人さんにお会いしたときに、「あの LP は『幻のレコード』ですよ」と語られたことがあったからである。

この作品のオリジナルは 1961 年 8 月から 63 年 2 月にかけて、日本コロムビアから 4 枚の 25cmLP（ALS-116、128、146、181）でリリースされた。稀覯なるものは概してあとあとに評定されるものである。この LP の真価を見出したファンは古レコード店頭に出ないかと探し続けたという。

カナロ氏からも賛辞を

「幻の歌謡タンゴ」の中身はというと、戦前と戦後復興期の歌謡曲と唱歌の極め付き名曲を 40 曲、タンゴにアレンジして演奏したものである。

代表的な曲目は「別れのタンゴ」「夜のプラットホーム」「赤い靴のタンゴ」、そして、タンゴに編曲された「長崎の鐘」「月の沙漠」などである。タンゴ演奏は 9 名から 12 名編成の「オルケスタ・フォンテ」であった。

注目を浴びたのは隅々にまで和魂洋才が漲っていたからであろう。アルゼンチンスタイルは伝統の要素を採り入れたが、コンチネンタル風は、ヨーロピアンにスパニッシュ、そしてアメリカン・タンゴにまで拡大して編曲・演奏されている。

1961 年当時に、ハイブリッドなどという意識はかけらもなかった時代にハイブリダイゼーション（相補的結合）が試みられたのである。このことが前衛的であり魅力的になったのだと思う。

LP を発売して半年、アルゼンチンタンゴ界の巨匠であるフランシスコ・カナロさんからわれわれスタッフに連絡が入った。カナロ氏は録音と公演のため来日中であった。筆者と編曲者、バンドリーダーは公演中の新宿コマ劇場に駆けつけ、しばし歓談してカナロさんからこの作品に対する称賛の言葉をいただいた。

筆者プロフィール

■ **高橋 廸良**（たかはし みちなが）

1931 年香川県小豆島生まれ。1956 年早稲田大学卒。同年日本コロムビア（株）入社。1962 年博報堂 TV 局入社。7 年間企画制作に携わる。その後ビジネス書、総合誌、経済紙などに寄稿、専門学校数校の講師を務めた。(社)日本オーディオ協会会員。

（写真・左より筆者、安藤邦夫氏、カナロ氏、堀口博雄氏）

この作品の編曲は安藤邦夫さんで、安藤さんは香川県丸亀市出身、東京音楽学校（現東京芸大）卒であり、このディスクで披瀝されるようにタンゴ編曲の鬼才で、楽団南十字星やその他のレコード録音などに数々の編曲を提供された方である。

オルケスタのリーダーは堀口博雄さんで、ヴァイオリンを旧新響の加藤為三郎さんに師事し、アーニーパイル・オー.ケストラ、ラジオ東京のオーケストラ、オルケスタ・ティピカ東京などをへてコロムビア・オーケストラの専属となった方である。

復刻に至るまで

この旧 LP 盤の真価が問われだしたのは、発売して約 20 年後のことであった。ある日、編曲者へタンゴ評論家の大岩祥浩さんから「タンゴフアンの中で素晴らしいと話題になっていますよ」との連絡が入った。それからは評論家の蟹江丈夫さん、島崎長次郎さん、大森茂さん、石川浩司さん、青木啓さん、ジャズ、ポピュラー音楽の瀬川昌久さんなどから称賛の言葉が届くようになった。

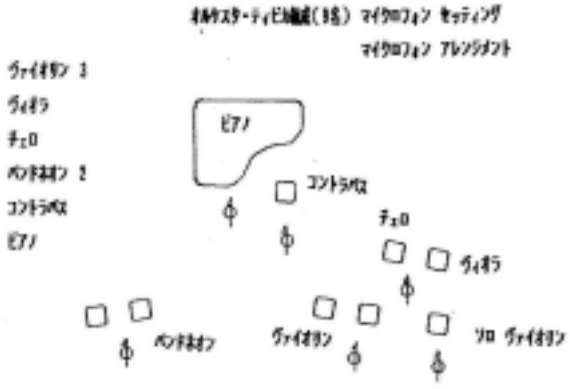
それから 20 年余の昨年、名盤の復刻を柱とする日本ウエストミンスターが発足することになった。同社の幹部にかつて「オルケスタ・フォンテ」のジャケットのアートディレクターであり、有能なレコードディレクターに変身した清水英雄さんが就任された。こうして「幻の歌謡タンゴ」が CD で復刻されることとなった。

CD 制作にあたって

この演奏は編曲も含めて巧緻を極めている。そこで CD 化にあたって、解説書を担当した筆者は CD プレーヤーの時間表示を利用してタンゴ特有のヴァリェィションなどの微妙な様態などを解説する工夫を凝らした。

また、原録音は磁気テープにステレオ収録し始めて間もない頃の第１回の作品であった。そんなこともあって録音機材の型式名など、録音当時のディテールをすべて記録掲載し、加えてピアノなどの据え付け楽器、ひいては演奏メンバー、録音エンジニアたちすべてを解説書に網羅した。これらの諸点が揃ったディスクの例は空前ではなかろうか。

原盤は、厳密にいうと磁気 6 ミリ、2 トラック、ステレオ、テープで、良い状態で保存されていた。いま流行りの言葉でいうとアーカィブは健在であった。こうして、演奏者たち、そして初期の機材に取り組んだエンジニアたちなど全スタッフの真摯な姿が彷彿とさせられることとなったのである。楽器配置とマイクアレンジは下図のようであった。



（楽器配置とマイクアレンジ）

なお、こだわりの企画を推進する日本ウエストミンスター社は、「幻の歌謡タンゴ」に先立ち、これも空前と言える詳細な楽曲解説を付したコンチネンタル・タンゴの集大成「Prosit Geczy：あの頃のタンゴ」全１巻 36 曲（原盤、日本コロムビア、1962 年）を CD で復刻した。

1962 年から 63 年にかけて筆者が制作し、日本コロムビアが発売した 3 枚シリーズの LP「コンチネンタル･タンゴ～想い出のゲッツィ」の復刻である。演奏はザ･コンチネンタル･タンゴ･オーケストラ(楽団南十字星メンバー)、編曲：安藤邦夫、東洸一であり、コンチネンタルの名曲を日本人向けに、そして理想のスタイルにアダプテーション化していて好評を博している。「幻の歌謡タンゴ」共々永く愛聴されることを願っている。

ステレオ創世記の貴重な作品

現在、私たちをとりまくオーディオ界では双耳聴効果を意識したステレオがあまねく普及している。しかし 50 年ほど前まではモノーラルが全てであって、それが空気や水のような自然の状態であった。

筆者が日本コロムビアに入社したのは昭和 31 (1956) 年であるが、日本のレコード業界、オーディオ界にステレオが導入されたのが昭和 33 (1958) 年で、日本ビクター、日本コロムビアがステレオ盤（海外原盤）をリリースしてステレオ時代の口火をつけた。

当時は 6 ミリ幅テープ、フルトラック、モノーラルのテープ録音であった。しかし、海外からはステレオ録音の機運がひたひたと押し寄せてきていた。この革新の好機を逃すまいと"ステレオ"という呼び名の再生装置を、総合家電、専業メーカーが競い合い始めていた。

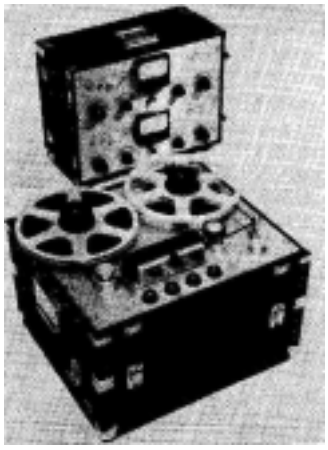
さてステレオ録音では、マイクロフォンのセッティングにおいて、マイクロフォン１個のワン・ポイントと、複数のマイクロフォンを用いるマルチマイクロフォンの場合がある。

ワン・ポイントはステージの前の最もよい場所で聴き、演奏全体がバランス良く、まとまって聴けるような演奏形態の音源集団の編成がよい。マルチマイクロフォンはそういった編成でもよいが、演奏者の個々の特色あるプレイが聴ける形態のものが良いとされている。

国内の各社はステレオ録音機を輸入して、カッティングマシンも稼働し、トライアル期間を経て数点の国内もののステレオレコードがリリースされつつあった。

筆者は、旧制中学、太平洋戦中から、もしレコード制作に携われたら、演奏もの、インストものをやりたいというひそかな願望があった。戦中、戦後の歌謡名曲への憧れは人後に落ちないつもりだった。

昭和 36 年、筆者は今でいうインストゥルメンタル（歌曲の器楽合奏化・略してインスト）である本作品の制作の機会に恵まれた。



（本作品録音に用いた AMPEX 社 351-2P 型 2 チャンネル録音機）

（EMT 社 140ST 型　残響付加装置）

昭和 30 年ごろまで、ヒット歌謡曲のインスト化は、軽音楽とか、演奏ものなどといわれていた。また昭和 26 年に発足した民間放送では、そのインストものレコードを「歌のない歌謡曲」と称して利用されていた。「歌のない歌謡曲」という呼び名には軽侮の意は全く無かったであろうが、筆者にとってはヒット歌謡曲のインスト化に期するところがあったのである。

級密かつ周到な編曲手法をオーダーし、屈指のミュージシャンたちを選抜でき、また、最新のテープレコーダー（写真上）と当時の業界垂涎の的であったリヴァーブ（残響付加装置：写真上）輸入第 1 号の稼動にもめぐまれ、当時としてこれ以上望めない作品を制作できた。

いまや半世紀前になろうとしている 50 から 60 年

代のテープ録音、そしてステレオ録音の黎明期の貴重な記録であり、かつ、タンゴ界の神様とも呼ばれるフランシスコ・カナロ氏から称賛の言葉をいただいた作品「幻の歌謡タンゴ」を皆様にもお聴きいただきたいと願っている。

付記

「オルケスタ･フォンテ：幻の歌謡タンゴ」

（JXCP-1012　別れのタンゴ　収録曲）

1.君の名は　2.夜のプラットホーム　3.長崎の雨　4.チャイナ･タンゴ　5.別れのタンゴ 6.夢去りぬ　7.泪のタンゴ 8.黒いパイプ　9.三日月娘 10.雨のオランダ坂 11.哀愁日記 12.銀座セレナーデ　13.古き花園　14.リンゴ追分　15.山のけむり　16.白い花の咲く頃　17.山のかなたに　18.出船　19.影を慕いて　20.美わしの宵

（全 62'13"）

（JXCP-1013　赤い靴のタンゴ　収録曲）

1.フランチェスカの鐘　2.君恋し　3.月の沙漠　4.タンゴ・ローザ　5.長崎の鐘　6.赤い靴のタンゴ 7.並木の雨　8.哀愁波止場　9.北上夜曲　10.巴里の夜 11.夢淡き東京 12.リラの花咲く頃　13.悲しき竹笛 14.恋は馬車に乗って 15.カスタネット・タンゴ 16.船頭可愛や　17.別れても　18.雨に咲く花　19.花言葉の唄　20.青春日記

（全 63'50"）

編曲・指揮：安藤邦夫

演奏：オルケスタ・フォンテ、高珠恵ストリングス、楽団南十字星

録音エンジニア：小林喜久之助、二見一夫、内田義男、荻野宣邦

カッティング：高須昭彦

録音日：1961 年 6 月～62 年 12 月

録音スタジオ：日本コロムビア内幸町スタジオ

（注１）　本 CD には同時期に制作された「ワルツ名曲集」からの作品も収録されている。

（注２）「オルケスタ･フォンテ：幻の歌謡タンゴ」

（JXCP-1012、JXCP-1013）各税込 2,415 円

発売元：日本ウエストミンスター（03-3989-1678）

販売元：コロムビアミュージックエンタテインメント

（全国 CD ショップ発売中）

（注３）「Prosit Geczy：あの頃のタンゴ」

（JXCP-1017～1018）税込 4,830 円

発売元：日本ウエストミンスター

販売元：コロムビアミュージックエンタテインメント

「オルケスタ･フォンテ：幻の歌謡タンゴ」

紹介パンフレットより

「Prosit Geczy：あの頃のタンゴ」

紹介パンフレットより